

郷土あかし

郷土館だより

第18号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

なぐさ り やく 慰めとご利益を求めて

五日市町の石造物 その4. 地蔵



五輪地蔵 (大悲願寺境内)

はじめに

解説書によると、地蔵信仰は末法思想の発生した平安末期に起り、鎌倉、室町期に広まり、江戸時代に入ると庶民生活の隅々に深く滲透したという。

確かに地蔵菩薩は末法の世にあつて衆生を救い、庶民の多種多様の願いごとを聞きとどける仏として親しまれた。今に残る各地の民話の中にも地蔵にまつわる話が多い。お地蔵さまのおかげで盲いた目が見えるようになったとか、戸口に米と味噌が置いてあつたとかいう類の話である。

浄土門の教えによると、西方浄土の主阿弥陀如来は、我身を捨てても悩める庶民を救済しようと誓いを立てた。

そこで「南無阿弥陀仏＝阿弥陀さまお頼みます」と唱えさえすれば極楽往生できると説く。しかし現実の阿弥陀さまは寺堂の奥に莊嚴に鎮座しているだけである。そこで阿弥陀の慈悲の実践者として巷間に出現したのが地蔵ということになる。地蔵は坊主頭に袈裟という飾らぬ姿で立現れた。江戸時代の人々はこの地蔵を各町内、村落ごとに石に刻んで祀った。その数は累積されて甚大なものとなり、地蔵は庶民の心の内面に定着し、日常生活に溶け込んだ。お産をひかえた女性は身近な地蔵に安産を祈願し、目耳を患う者はそれぞれに靈験ありと聞く地蔵を尋ねて平癒を祈った。祈願成就の暁は頭巾、腹掛け、穴あき石などを携えてお礼詣りをした。毎月二十四日は地蔵の縁日として町内、講中で祝われた。辻の地蔵にも団子などが供えられ、祠のある地蔵には千羽鶴が飾られたり、万燈がともったりした。地蔵は庶民の中の弱者、女子供、年寄、病者貧者の救済者であるが、特に地蔵が

賽の河原で鬼にいじめられる子供を庇う話は仏画や和讃(仏話を歌にしたもの)によって広められ、子供の庇護者として信仰を集めた。早世した我子の為に地蔵像を造立する者も多く、子供の墓石に地蔵を刻む例(後述)も多くでた。江戸時代は乳幼児の死亡率が高く、ときに間引き(生活難から出産直後の児を殺す)も行なわれたので、それだけ地蔵への思いは深まった。地蔵信仰の中には女性の怨念が入りこんでいるようである。

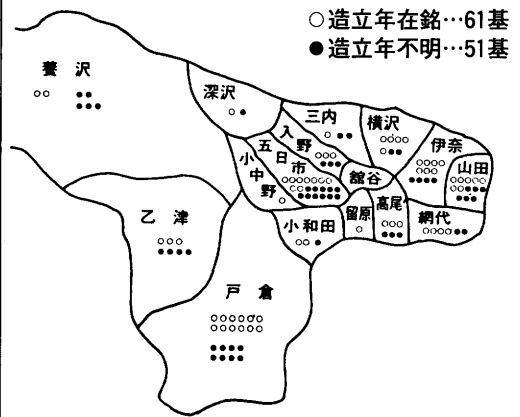
ところで巷間の地蔵にはしばしば、延命、子育て(子女)抜苦(とげ抜き)等と命名されるものがある。地蔵が手にもつ宝珠は如意珠といって、庶民のあらゆる願いをかなえる力をもつ珠といわれるが、願う側からいえば万屋より専門家の方が頼り申斐があるのだろう。これらの名称は地蔵の職能分担を示す。「延命地蔵」=諸病平癒に

表1 地区別・年代別地蔵一覽

● 地蔵 95組
○ 六地藏 17組

年代	地区	養沢	乙津	戸倉	小中野	五日市	小和田	留原	高尾	入野	深沢	三内	横沢	伊奈	網代	山田	計
1660~1989 万治3~元禄2			●		●												1
1690~1719 元禄3~享保4			●	●		●●				●				●	●		7
1720~1749 享保5~寛延2		●●						●		●			●	●	●		7
1750~1779 寛延3~安永8				○					○								5
1780~1809 安永9~文化6				●		●	○			●		●	●	○		●●	10
1810~1839 文化7~天保10			●	●		○							○				5
1840~1869 天保11~明治2				●●		○			●				●	●	●●		8
1870~1899 明治3~明治32				●		○											4
1900~1929 明治33~昭和4				●										●●			4
1930~1959 昭和5~昭和34			●				●										3
1960~1986 昭和35~昭和61				○		●					○			●●	○	○	7
不詳		●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●		●●●	●●	○	●●	●●	●●	●●	●●●	51
計		7	7	20	1	20	3	1	6	5	2	3	7	11	6	13	112

地蔵 地区別分布図 112



靈験あり、「子育地蔵」=出産育児に靈験あり、「抜苦地蔵」身心の悩みの救済に靈験ありで、病院でいえば内科、産婦人科、精神科に当ろうか。しかも実際は更に目、耳、歯痛、おでき、いぼとり等々に細分され、この地蔵は何々に特効があるなどと喧伝されるものが出た。地蔵信仰には靈の救済の面と現世利益の面とがあるが、後世になるに従い具体的な細分化が進んだように思われる。

1. 五日市町の地蔵分布

今回の石造物調査で収録した地蔵の数は、112点に達した。この中には墓石としての地蔵は含まない。地蔵は如意輪観音とともに舟型光背に浮彫のスタイルで墓石に彫られた。墓石の場合は光背に「何々童子」などと刻まれているが、文字が風化で読みとれないときは、所在地や塔型で判断した。大悲願寺の無縁墓石塔だけでもザッと数えて30近い地蔵墓石が積みこまれている。地蔵墓石の数はおびただしく収録は困難である。また地蔵はしばしば三界万霊塔の主尊として使われる。この場合も三界万霊塔に分類した。

五日市地区の地蔵の石材は例によって軟かい伊奈石が主体で、まれに御影石が混る程度だから、風化、剥離が激しく、首のとれたものが多い。首をセメントで補修してあればまだしも、胴体だけ、あるいは首の代りに石をのせたもの等々無惨な姿が見受けられた。どこまで収録するかは傷みの程度で判断した。もし墓石を含め、手当り次第に収録したら、その数は何百に達するか判らない。(六地藏は6体で1点とする)

地蔵の分布は上記図表によってみていただくとわかるが、従来の調査(「郷土あれこれ」15号, 16号, 17号)でみる巡拝塔、馬頭、庚申の分布とやや趣を異にする。

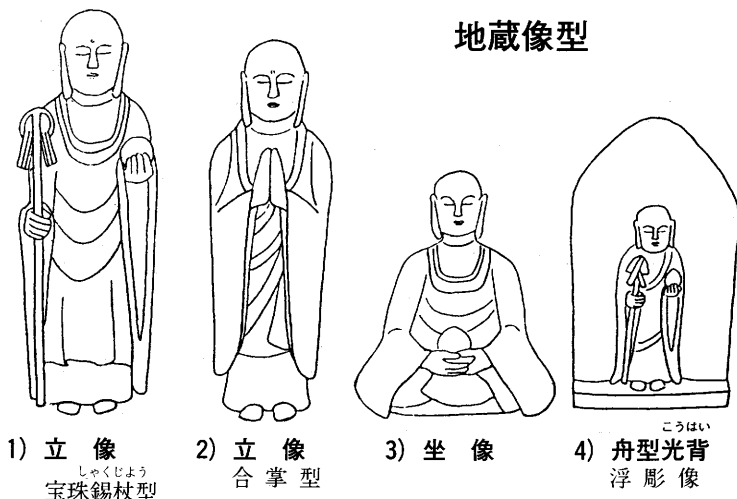
後三者は五日市の西部地区に多く、東部地区に少なかったが、地蔵はむしろ反対である。東高西低の趣がある。地蔵の多くは丸彫で硬い自然石より軟い伊奈石が使い易いから、当然伊奈石産地の東部に多いことが考えられる。また明治初年西部地区に廃仏毀釈の運動が激しかったことも考慮に入れてよいかも知れない。数が2ケタに達した地区は五日市、戸倉、山田、伊奈で概して人口の多い所といえる。地蔵は馬頭観音などと違い、山野より人家の集う巷ちまたを好む人間臭い仏さまといえよう。

2. 造立年と造立者

地蔵の仏体に銘(文字)を刻むことは原則的にないので、丸彫地蔵は台石を探してその文字を読みとらねばならない。台石のないもの、あっても無銘か、判読困難なものが多い。辛うじて判読した61基について30年刻みの年代表を作った。上限は貞享3年(1686)、下限は昭和60年(1985)で300年に亘っているが、その間、どの年代に片寄ることもなく平均して造立されているのが目につく。地蔵信仰は一時のブーム現象でなく、息長いものであることが知られる。ただし、その間、造立者の信仰内容や造立主旨は当然変容していよう。最近の造立は主に六地藏である。いま各寺院で墓地の整備が進んでおり、その威容を整えるために新調されているように思える。

造立者について手掛りの得られる銘文は少く、僅に40基である。そのうち個人名のある21墓についてみると、地区の有力者と推定される男性名と、僧侶名とが多いが、少数ながら女性も混る。「何々の母」というのが2基あった。次に集団(講中・地区)名が19基あるが、そのうち14基が「念仏講中」で、しかもうち8基が「女講中」である。これは注目されてよい。地蔵の造立が念仏講中

地藏像型



1) 立像
宝珠錫杖型

2) 立像
合掌型

3) 坐像

4) 舟型光背
浮彫像

表2 像型別地藏数

丸彫	立像	(1)宝珠錫杖型	43	57
		(2)合掌型	12	
		(3)その他	2	
浮彫	坐像	(4)宝珠をもつ、 ときに子供を抱く	16	19
	舟型	(5)立像	16	
六地蔵	自然石	(6)立像	3	17
	文字塔など	(7)一石型(浮彫) を1つ含む	3	
合計				112

と深い因縁があることが証明される。また地藏が伝統的に女性に人気のある仏であったことも知られる。

写真下は小中野の大鳥神社境内にある五日市最古の地藏で、大型の舟型光背をもつ、残念ながら下部が折損しているが(塔高100,巾57cm)、正面上部に地藏と阿弥陀三尊をあらわす梵字がある。地藏信仰が阿弥陀信仰から派生したこと、また塔形が中世の板碑の流れをくむこと、などがよくわかる。「願以此功德平等利益…」(この地藏造立によって、みんなにお恵みがありますように…)という願文も刻まれている。裏面をみると、貞享3年8月18日の日付と「當所男女念仏講衆」という文字が読める。「平等利益」という字句は地藏の台石によく見かける。「ご利益」は狭い経済的利益を意味しない。もっと幅広い恩恵を指すようである。しかし阿弥陀の「慈悲」よりは一步ふみこんだ現世的なニュアンスがある。ともあれ「平等利益」を授かることが地藏造立の一般的な動機と解して誤りはなさそうである。

小中野 大鳥神社

(宝珠については前述した。)坐像にも各種のスタイルがあるが、宝珠を両手で抱く像が多く、子供を抱く型、

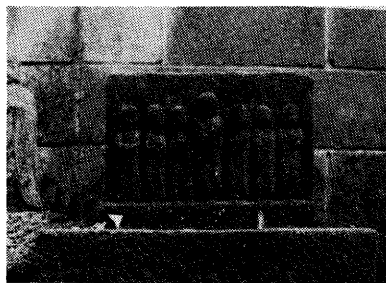


青木平 陽谷院

(写真左)も2例ほど見かけた。この場合は完全な子育て地藏である。舟型光背をもつ浮彫像は墓石と混同し易いが、墓石の場合は概ね合掌型である。

六地藏は墓地の入口、あるいは寺院の門前に置かれる。六道(地獄、畜生、餓鬼、修羅、人間、天上)をめぐる人間を救う地藏の姿を表現したもので、一体一体持物が違う。

写真上は戸倉真光院墓地、下は深沢の真光院墓地(昭和60年製)である。死後も輪廻転生してやまない人間を救済しようとする六地藏が墓地の入口に立つのは如何にも所を得ている。六地藏にも女人講中の造立になるものが多い。



▲戸倉真光院 ▼深沢真光院



3. 地藏の像型

五日市地区112基の地藏の像型については図と表2をご覧いただきたい。地藏といったとき、われわれがイメージに描くのは宝珠錫杖型であるが、統計的にも裏書きされる。錫杖は経文をとなえるとき調子をとる一種の楽器であるが、地藏の衆生済度の旅に当っては杖にもなる。

4. 町内の珍しい地蔵例

次に町内の地蔵の中から注目されるもの三、四を挙げてみる。

イ) 五輪地蔵 大悲願寺 (写真表紙)

57×30×20 (高さ、幅、厚みcm以下同じ) 造立、寛延元年 (1748) 9月13日。施主、(如) 環法弟他。材質 伊奈石。

これは五輪塔影を背景にもつ浮彫立像で、高野山の地蔵尊を写したと台石に刻まれている。五輪地蔵は寺院臭が濃い。五日市では大悲願寺に三体、玉林寺に一体ある。この地蔵は紀年も造立の次第も明示され、形態も一番よい。

ロ) 野仏地蔵 (仮称) 戸倉371 宮本氏門口

52×36×22 造立、元禄12年 (1699) 6月吉辰。施主、北嶋五郎兵衛。材質 みかげ石。

みかげ系の川石を彫りくぼめて造った浮彫地蔵。紀年の判明した順でいうと4番目に古く、300年近い風雪に耐え、程よく風化し、如何にも野仏らしく可憐である。造立主旨不明。



ハ) 抜苦地蔵 五日市栄町

48×33×20 造立年不詳。材質 伊奈石。

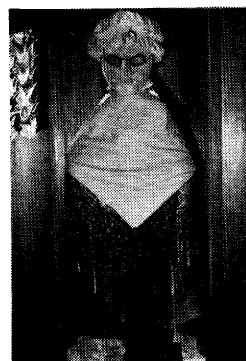
丸彫坐像で傷みがひどく、写真でみるように体を布で縛り崩壊を防いでいる。五日市では一番広く立派なお堂におさまり、ぶ厚い腹掛けをにかけているので、外目には痛々しい姿は見られない。大正15年7月24日お堂の落成式が挙行されたが、出納帳によると、二宮歌舞伎を呼び500余円の経費をかけている。以来昭和30年代まで毎年7月24日は余興を催し、町内を挙げての賑やかな祭日となっていた。現在は、毎月24日に栄町上組の人々が輪番で奉仕している。お賽銭も月々2000~3000円は上るといふ。お堂を覗くといつも電燈が点っている。目下の支出は電気料と電球代である。町内の長老の言によれば、お体がぼろぼろなのは、みんなの苦しみをお引受けになったからという。



ニ) 延命地蔵 五日市上町

98×36×20 造立年不詳 宝珠錫杖型立像、材質 伊奈石か。

立派な木祠に祀られ、毎月24日の奉仕をうけている。目の病に靈験ありということで堂内には、め印の絵馬が奉納されていた。金キラのラメ糸のショールをして、目鏡をかけているのはご愛嬌である。



ホ) 子育て地蔵 五日市下町

43×18×13 造立年 元禄12年 (1699) 2月16日。宝珠錫杖型立像。材質 みかげ石。

鉄筋コンクリートのお堂に鎮座している。堂前に台石らしい石がある。これには「五日市村下町女人同行二十七人」と刻まれ、元禄の紀年とともに「一心仏」という名称も彫られている。元禄といえはこのあたりは炭の市で賑い、炭問屋が軒をつらねはじめた頃である。江戸時代の当地区名は下宿又は中下宿であった。あえて下町と刻んだのは面白い。町は盛り場を意味する。下町は誇りをこめた表現であろう。当時の女性の心意気を感じられる。いずれにせよ、こと地蔵に關すると昔の女衆はほん気になったようである。



おわりに

いま、全般的に見られる地蔵像の傷みは、地蔵信仰の風化を物語っている。地蔵信仰には、もともと宗教というより風俗習慣と呼んだ方が適切な面があった。現在お守りしている方々も、それが地区の習慣であるから、何の気もなく繰返しているようである。

しかし江戸時代に逆のぼって見ると地蔵は地域の守り神として住民の心をささえ、住民と哀歎を共にしてきた長い歴史をもっている。どの地蔵にもそれなりの由緒、伝承があるようだ。いま、それらを掘り起してみるのは、単なる回顧趣味ではなく、かつての民衆生活の実相を探りあてることになり、さらには現在のわれわれの意識の座標軸を確かめるうえで有効な働きをしてくれる。